The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	非相称の生成 : そのデザインにおける意味
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	デザイン理論. 1983, 22, p. 23-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52576
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

非相称の生成

——そのデザインにおける意味——

トロント大学(カナダ政府給費研究者)　藤田治彦

本論は，周知のロココ的非相称を専門的に扱うものでも，専らのロマンチシズムの発露としての非相称的形態の生成について論ずるのでもなく，むしろクラシシズムとロマンチシズムとの狭間に生じる非相称の問題について，デザインの方法と様式という観点から論述するものである。従って，本論が対象とするのは，まったく自由な形態や言ゆる不定形ではなく，左右相称の一部を崩した形態や，むしろ相称形自体の造形的意味と，それらの歴史的展開である。非相称的造形と言えば，近代ヨーロッパ人にとっては，中世のヨーロッパか東洋，殊に中国や日本，が連相されたわけだが，本論ではそれらの古い文化の地域とは対照的な新大陸アメリカにおける非相称の造形的発展に至る迄を論議し，相称および非相称の現代的意味についての基礎的考察とする。

Ⅰ．左右相称としてのシンメトリー

非常に多様な意味を含み得る「シンメトリー」という言葉を，いささか限定的な「左右相称」の意味で用いることの多いデザインの分野は建築であろうが，「シンメトリー」は元来かなり建築的な概念あるいは原理であり，「左右相称」も別な意味で建築的または構築的な形態である。シンメトロフォビア（sym-

metrophobia)と言って，或る特定の文化がシンメトリーを避けるとされることもあるが，広義のシンメトリーは言う迄もなく，左右相称も古代から現代に至るまで，基本的形式として広く用いられてきた。しかし，シンメトリーという言葉と左右相称という意味が強く結び付けられたのは近代になってからのことのようである。

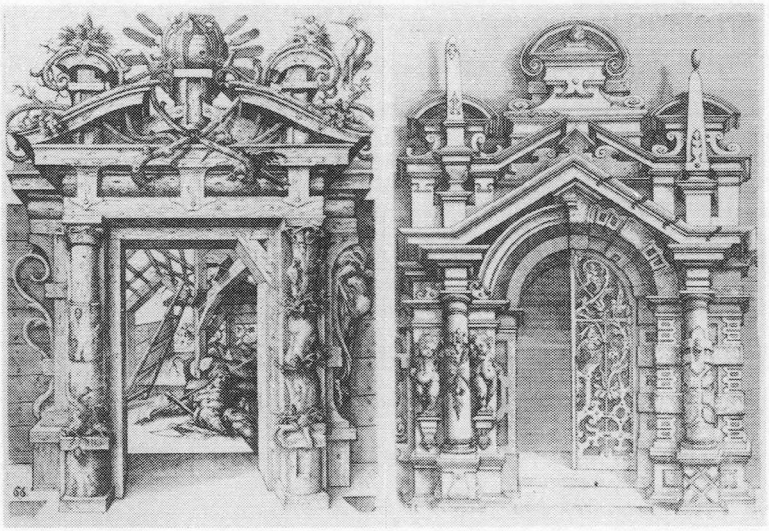
「基準部に従った建築物各部間および各部と全体との間の照応関係」，そして，「神殿と理想的人体との照応関係」という“symmetria”の記述を含む，Vitruviusの建築書が近代語訳としても出版される16世紀半ば近くになると，近代英語の“symmetry”に相当する言葉の使用が確認されるようになるが，それらの意味は必ずしもVitruviusの“symmetria”には合致しないようである。一方，古典的シンメトリーと中世的な大宇宙と小宇宙の照応説とがルネサンスのイタリーにおいて融合される経緯，およびその歴史的意義は，Rudolf WittkowerやErwin Panofskyらの論ずるところで，同じく16世紀の英国で邸宅建築がシンメトリカルな傾向を強めつつあった背景にMark Girouardは類似の照応説を見ている。[1)]

ルネサンスからバロックにかけて，シンメトリーは重要な造形原理でありえたが，それをVitruviusにおける“symmetria”の忠実な継承とすることはできない。科学的方法と経験論の発展の中で，権威的に与えられた絶対的な美的構成という古典の神秘的教義は懐疑の対象となりつつあり，1670年代のフランスでは，「古典派」Blondelと古代のオーダーの絶対性を否定する「近代派」Perraultとの思想的対立が生じる。Vitruvius建築書のフランス語訳に際して，Perraultは古典の“symmetria”を“proportion”と概ね解し，当時の，即ち近代フランスの“symmetrie”は左右相称のような相対する部分の均等性のことだと記した。[2)]この説明からして，既に，“symmetrie”が「左右相称」的な意味で，遅くとも1680年代には，フランスで使われていたと考えることができる。だが，この左右相称のシンメトリーは，古典の“symmetria”にまった

く矛盾するわけではなく，「建築物各部の照応関係」および「建築物と人体との関係」の両者に共通し，常識的かつ経験的に理解され，数学的にも厳密な「左右相称」の意味が近代人によってシンメトリーに強化され，古典の微妙な比例関係等の含蓄は他所へ移された形であろう。むしろ当時のフランスは，シンメトリーと結合された大小宇宙の照応説が，より現世的な姿で，宮殿等に示されつつあった。

Ⅱ．左右非相称の成立

左右相称への強い意識は左右非相称の存在に伴われるであろうが，18世紀のロマンチシズムを待つことなく，16世紀から17世紀にかけて左右非相称の建築的形態が描かれている。16世紀末にニュルンベルク等で出版されたWendel Dietterlinの ***Architectura*** がその一例で，入口や室内等の非相称の図版を含む。これは一種のパターン・ブックであり，２種あるいはそれ以上の意匠を１葉に納める表現形式とひとつの非相称的な意匠との境界が消失したものである



図―１　Wendel Dietterlin, *Architectura*（1598年）の図版

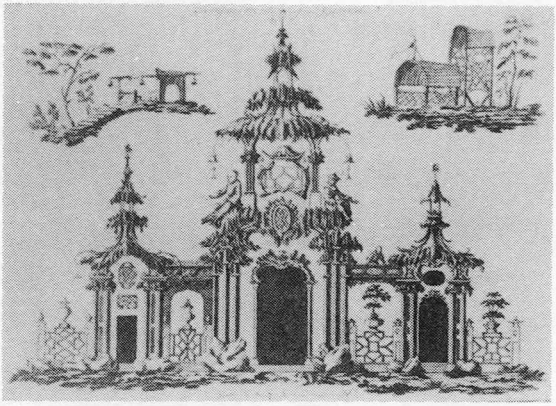
(図—1)。Dietterlin風の左右非相称の拱道入口は，Peter P. Rubens による絵画にも見られる。[3]それらの歴史的意義は，例えば，中世の非相称的建築物の多くが各種状況の偏差と変化に応じて形成されたのに対し，摩訶不思議な物への興味から，予め非相称の建築的形態として構想されていることで，多くは，建築物とそのオーダーの本来の文脈に対する故意の背叛であり，一種のナマリズムである。

欧州各地で左右相称としてのシンメトリーの理解が定着するようになる18世紀前半近のシンメトリーの意味の変化は，基本的には，古典的伝統の範囲内での意味の限定または力点の移行であった。18世紀も後半になると，この特殊なシンメトリーの意味は否定的観点から強化され，ピクチャレスクの諸動向に関わる人々にとって，シンメトリーは嘲笑の対象ともなる。左右相称の美は真正面から知覚されるのみとの理由で，Richard Payne Knightはシンメトリカルな田園住宅を批判し，非相称を奨めた。[4]しかし，英国においてさえ古典的建築の伝統は根強く，特殊な邸館を除けば，そう多くの非相称的建築物が18世紀に実現されたわけでなないし，ピクチャレスクは風景が必ずしも非相称的建築を要求したわけでもない。

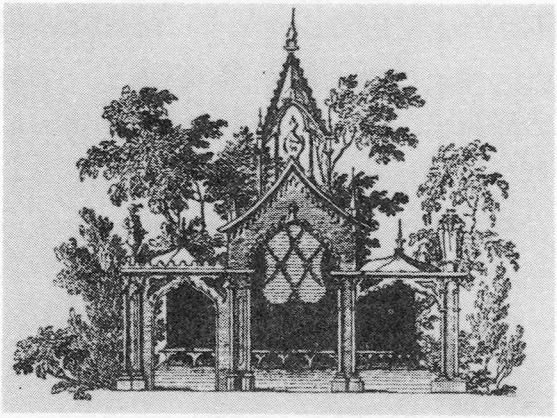
18世紀の英国で構想された非相称的建造物は相当な数に昇り，多くは中世と東洋，殊に中国，との連想になる。1750年代には，William Halfpennyらがゴシックに加え「中国風」と銘打った各種図案本を出版しているが，就中，Paul Deckerの本は図版の多くを Thomas Chippendale の *Gentleman and Cabinet-Maker's Director* (1754) の図版をも担当したMatthias Darleyに負い，左右非相称の意匠の生成には，ここでも，家具カタログ等に用いられた，単一図版に異なるデザインの半分を夫々左右に示す方法が関与していると思わせる（図—2）。相異なる意匠の左右を取り，中央で貼り合わせ，ひとつのものとして呈示するのは，単一の原理的構成に複数の形態が考えられるということで，その時代が唯一固有の様式を信奉していないのを示すと共に，表層部に物の本質を見る強い傾向を暗示する（図—3）。

非相称と中国あるいはアジアや東洋全体とを結び付けるのは英国に限ったこ

とではなく，ヨーロッパ大陸側でも，例えば，Jean-Charles Delafosseによる諷喩的構成のシリーズの中で「アジア」には徹底した非相称的形形態が用いられている。その他の構成にも非相称的に見えるものはあるが，それは左右相称の建物の建築彫刻が左右で多少異なるという程度の相異であり，当時のヨーロッパ人の「非相称の東洋（殊に中国）」という思い込みの強さが窺われる（図—4）。



図—2　Paul Decker, *Chinese Architecture, Civil and Ornamental* (1759年) の "Temple Fronting a Cascade"

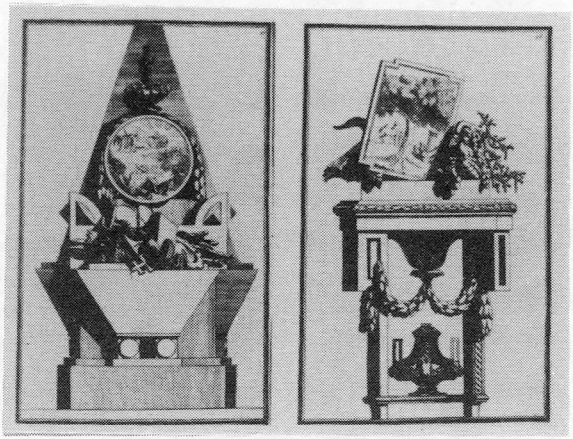


図—3　Paul Decker, *Gothic Architecture Decorated* (1759年) の "Garden Seat"

Ⅲ．北アメリカにおける非相称的造形

ニュー・メキシコ州のプエブロの遺構や言ゆる「スパニッシュ・コロニアル」の小さな教会には非相称形のものが幾つも見出され，前者は12世紀，後者は17世紀に遡る。合衆国南西部のスパニッシュ・コロニアルの教会は，概ねバロック・スタイルである

当時のメキシコの教会の素朴な土着形態であり，十字型プランの交差が直角から相当に外れていたり，壁に穿たれた窓の高さや大きさが不統一であったりする。これらのものは19世紀末から20世紀初頭にかけて「プエブロ・スタイル」や「スパニッシュ・コロニアル・リヴァイヴァル」として復興され，左右不揃の邸館や，あたかも双塔が計画されていながら片方の塔のみが実現されたという表現の教会等が数多く建てられたが，モダン・デザインにおける非相称形態の導入という観点からは，19世紀の「ゴシック・リヴァイヴァル」や「クィーン・アン・リヴァイヴァル」の後に続くもので，北アメリカの造形文化において主導権を持ったものとは言い難い。



図―4　Jean-Charles Delafosse, 諷喩的構成（1768年以前），“イスラエル”（左）と“アジア”（右）

合衆国北東部のニュー・イングランドを中心とした植民地文化においては，非相称形態に非常に稀であり，農家の一部や手作り家具の装飾等に少数の例が見出される程度である。それらが生じた時代は，英仏を通じた古典的形態規範の影響が強まる以前，のアメリカにおける「中世」と見做されたりもする。

その後のアメリカ北東部の造形文化への非相称形態の導入は，「英国のロココ」，殊にChippendaleの *Director* あたりから本格化する家具カタログあるいは図案集等の出版や，それらを携えてアメリカへ渡って来た職人によると思われる。米国で「チッペンデール」と呼ばれる家具自体には非相称的要素はほとんど

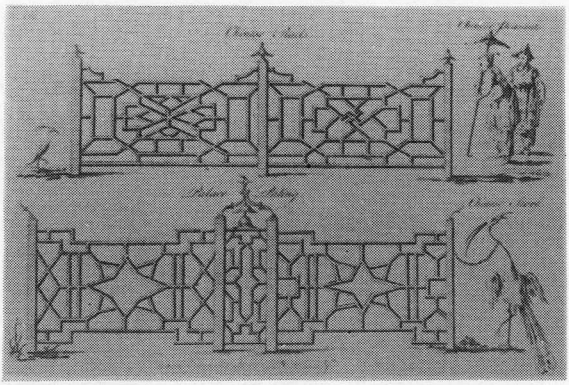
無いが，*Director* 等の出版の時期である1750年代から1760年代にかけては，非相称的形態に興味を示す職人も多かったようである。

当時のアメリカにおける家具生産の中心地であるフィラデルフィアで隆盛を究めた家具師にThomas AffleckとBenjamin Randolph が居り，共にチッペンデール風の家具を多数作ったが，よりロココ的なRandolph が1770年前後に用いていた業務用名標は，同世紀の前半に欧州大陸でOppenordt，Meissonnier，そしてCuvilliés らが盛んに用いた，歪んだ“cartouche”状のものに各種家具を配したものである。但し，Randolphへの直接の影響は，フランスからではなく，ChippendaleやThomas Johnsonのような英国からのものであろう。その名標に描かれたものは，リボン・バックの椅子やロココ風の肘掛椅子からゴシック風の窓，果ては巨大な古典的建造物の列柱にまで至る。そこで興味深いのは，そららの家具の多くが，*Director* 等の家具カタログと同様に異った２種のデザインを中央で貼り合わせた形で示されているために，ロココ的枠組と相俟って，その名標全体が非相称的意匠の集大成となっていることである（図―５）。

図―５　Benjamin Randolph（フィラデルフィア）の業務用カード(1770年頃)

18世紀中頃の英国に見られる中国趣味は，かなり早い時期にアメリカにも現われたようで，Chippendaleの家具カタログ等に加え，既述のHalfpennyによる*New Designs for Chinese Temples*（1750～52）*Twenty New Designs of Chinese Lattice and Other Works*（1755），そして*Decker*の*Chinese Architecture, Civil*

and Ornamental (1759) 等も1760年頃には米国内に入っていたようである。その建築への影響は装飾的なものに停まるが，「ジョージアン」植民地風の建物の屋根などに多く取り付けられた中国風の欄干は，かなり早くから用いられ始めた。中国風の格子を用いた屋上の手すりは,「チッペンデール屋根欄干」とも言われ，Chippendale らが中国風の天蓋付寝台等に用いた直線的で単純な意匠のものである。但し，これらの格子を付けたニュー・イングランドの古い建造物の中には1754年以前に竣工したものも含まれ，*Director* の出版よりも前に用いられ始めた可能性もある。また，この回転のシンメトリー等を多用した中国風の格子自体，単純ではあるが，西洋の典型的文様観には異質な側面もあり，それがこの東洋趣味の各種意匠において愛好された理由のひとつであろう(図—6)。



図—6　Paul Decker, *Chinese Architectecture, Clvil and Ornamental* (1759年)の "Chinese Rails"

中国風の格子は，ヴァージニア州シャーロッツヴィルにあるThomas Jeffersonの自邸モンティセロ (1793～1809) にも用いられている。ひとつは屋上の欄干，もうひとつは一階の窓の腰の部分，更に両側の離れ屋と主屋との連絡部の手すりに使われ，屋外用ベンチ等にも用いられている。それらのすべてが一時に作られたものか否かは未確認だが，少くとも屋上の中国風またはチッペンデール風の格子はJefferson の弟子であるRobert Mills によるモンティセロの図面に描かれており，おそくとも，その設計が検討され始めて約30年を経過した1803年頃には，そのような意匠ができていたことが判る。

Jefferson は，クラシカルなリッチモンドのヴァージニア州会議事堂 (1785

89）やシャーロッツヴィルにあるヴァージニア大学の諸建築物（1817～27）の設計のために，アメリカ建築における新古典主義の代表的人物と見做されもするが，決して排他的ではなく，多様なものが併存する状態を許容した。前述のモンティセロも様々な異国的かつ歴史的諸様式のパヴィリオンで飾ろうと考えていたようで，1770年代初頭にはゴシック風の寺院さえ計画され，それは19世紀の初めまで引き続き検討されていたようである。

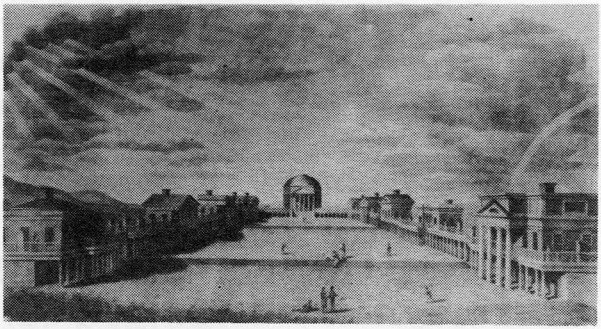
北側に建つ大きなロタンダの左右に10棟の教授パヴィリオンが整然と配列れたヴァージニア大学のキャンパスは，一見，厳密な左右相称の構成を有するが，実際には，非常に多くの不均等な要素に満ちている。その主なものだけでも，10棟のパヴィリオンすべての平面および立面における相違から，中央のロタンダを通る軸に対して各棟の奥に設けられた学生寮の相異なる形態，及び，その寮と各教授パヴィリオンとの間に設けられた庭園の規模と植栽の違い，更には，その敷地自体の相当な起伏にまで至る。それ以外にも，小さな不均等要素ではあるが，ここでも用いられた既述の中国風欄干が非相称的に配列されていた事などは，それらが取り付けられる建物が相称的な古典形態のものであるだけに，常識では理解し難いことである。

このJefferson によるパヴィリオン・プランに関しては，ルイ14世のマルリーの館など，欧州の類似の先例が指摘されるが，ヴァージニア大学に匹敵する程，相称的なプランに多様性を導入し，不規則性を許容した例は無い。古典あるいはルネサンスの相称的形態または平面とは言っても，例えばJefferson のイメージの遠い源泉になっているであろうPalladio の建築にも相称的なファサードの背後には平面上の左右非相称が部分的にあるし，壁面や建物上部の建築彫刻までが左右相称では，むしろ奇妙である。しかし，Jefferson の作品に至っては，それが建築的要素か装飾的要素かを問うこと無く，非相称的構成が実行されている。

非相称的性格がここまで徹底されると，それを単なる異国趣味やロマンチシ

ズムの産物とは見做せなくなるが，ロココ，ゴシック，そしてシノアズリの家具を満載したChippendaleの*Director*と同様に，ヴァージニア大学も一種のカタログだと言える。但し，それは建築百科事典と呼ばれるのがより適切で，Jefferson は相異なる10棟のパヴィリオンを「良き建築と美的理念の諸典型」であり「建築講話の標本」であると考えていた。しかし，ヴァージニア大学のキャンパスが示す最大のデザイン教育は，斯様な詳細ではなく，多様の緩やかな統一であり，自由と秩序との共存であろうと思われる(図―7)。

ヴァージニア大学におけるアメリカの非相称の試みは，合衆国初の本格的な連邦教育研究機関として，ワシントンD.C. に設立された，スミスソニアン協会の建物のデザインに引き継がれる。現在の本部棟であるスミスソニアンの最初の建物の設計は1840年頃から試みられ，当時，「連邦建築家」となっていたMills による建物と庭園の概要図が伝わる。彼は多数の連邦建造物を手掛ける古典的傾向の設計者だが，そこに提案されている建物は，左右相称とはいえ，各様の塔を有する中世風のものである。その造園も，直線的な枠組の内に不規則的な遊歩道をうねらせ，ロマンチシズムの公共建築への波及を物語る。この計画全体に観られる基本的にはクラシックな構造とピクチャレスクな多様性との共存は，Millsの師であるJefferson によるヴァージニア大学を想わせる。

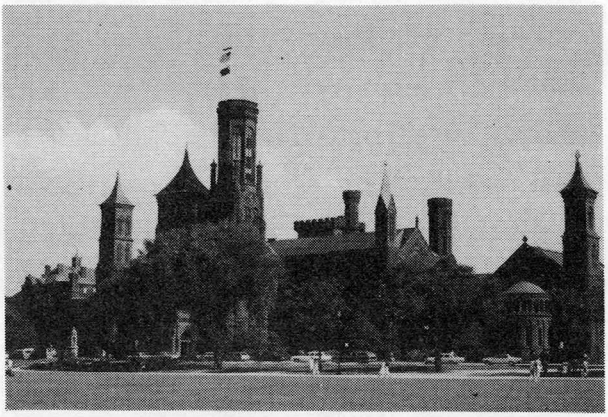


図―7　Thomas Jefferson, University of Virginia
(1826年のBöyeプリント)

1845年には，社会思想家Robert Owen の息子達によって，やはり中世風の案が作られたが，翌1846年に東部の幾人かの建築家によって，デザイン・コンペティションが行なわれた。提出諸案はMills 案以来の低層棟と各様の塔との組み合わせだが，O.G.Warren案は，同じニューヨークの建築家Richard Upjohn が数年前にイリノイ州の或るカレッジのために設計したものによく似た，双塔を中心としながらも両翼部のデザインが微妙に異なる左右非相称の形態を取っていた。James Renwick は他の競技設計参加者の諸案を参照した後に2種類の案を再提出して勝利を得るが，そのひとつで「ゴシック・デザイン」と呼ばれたものは，Warren 案に酷似した双塔を正面中央に建て，背面にはオクスフォード大学クライスト・チャーチのトム・タワーを想起させる別の単塔を戴く。このトム・タワー型の塔はフィラデルフィアのJohn Notman の提出案にも使われており，Renwickの「ゴシック・デザイン」は結果的にWarren案とNotman案とを重ね合わせたものになる。

Renwick の「ゴシック・デザイン」で更に奇妙なのは，向って左側の棟にふたつ，右側の棟にはひとつだけ描かれた小塔の不均等な配置である。現在の建物から推測して，それらの小塔は階段室上に鐘楼の類をのせたものだと思われるが，このように相称的な建物の左右にそれ程のプログラムの相違は考え難いし，そのように中途半端な形で左右相称を崩す必然性は，概ね均等な敷地条件から判断して，ほぼ有り得ない。考え得る非相称的配置の理由は，後方のトム・タワー型の塔が斜めからの透視図では中央の双塔の左右何れかに現われる故に，Renwick が競技設計という状況から図面上のデザインの均衡を計り，小塔の数を左右で変えた可能性である。この推論は，同じRenwickによる別案が，やはり概ね左右相称の平面を持ちながら，その場合は，すべて形の異なる塔と翼部の構成体として提出されているという間接的な裏づけがあるので，何らかの史料による実証が期待される。その別案は「ノーマン・デザイン」と呼ばれ，最終的にそれが選ばれて実施された（図—8）。

アメリカの公共建築における非相称的形態の嚆矢となるスミスソニアンの建物のデザインは，Robert Owenの息子のひとりRobert Dale Owenによる著作である *Hints on Public Architecture* (1849) に理論的支持を受けるが，スミスソニアン建設委員会の中心心的人物でもあったR.D.Owenの論調は，その非相称的で自由な形態とアメリカ合衆国の政体との連合論的傾向を強く示している。



図—8　James Renwick, Smithsonian Institution (1846年設計)

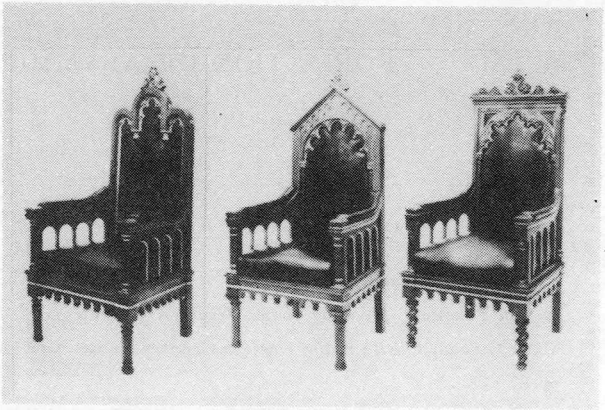
「わが共和国の建築物は柔軟性を持たねばならぬ。その外形が内的適応を支配し指図するのではなく，内部に従い適合せねばならぬ。わが政体の必須の原理である自由が，わが建築体系の随所でその真髄を示さねばならぬ。」[5)]

Owenは中世の建築諸様式を支持したが，その理由は，公共建築に一般的に用いられてきた「グリーク・リヴァイヴァル」等の古典的様式と比較して，それらが内部の目的に応じた形態を取り，増改築の自由度も大きく，実用優先の時代の実際的な国家で用いられるべきものだと考えたからであった。[6)]

Owenの著書は，或るものを作る際に様々な歴史的形態から各部を選び組み合わせることを勧めた点でも，歴史的に重要である。そして，彼はその組み合わせの行為を「創造」として認めた。ヴァージニア大学とスミスソニアンとを隔てる数十年は，古典的形態と中世的形態という造形的に大きな差を生み出したが，それは単なる復興様式の違いには停まらない。或る美的理念に特定のオ

ーダーが対応するといった古典的建築観は既に消滅し，純粋さには欠けても，複雑さを増す建築プログラムを全体的に包み込める様式が求められる時代にアメリカは入っていた。

スミスソニアンの評議員室にはRenwick　がデザインした家具が未だ幾つか残っている。Renwickは評議員室用にテーブルをひとつと肘掛椅子18脚をデザインしたようだが，1865年の火災で半数が焼失した。残る9脚中の6脚までが異なった意匠のもので，それはスミスソニアンの建物と同様に，Renwickによる多様な形態の追求を如実に物語るものである。それと同時に，それらは外観上非常に異なっているが，同一の基本的構成体の脚や背の一部を取り代えた物であることにも注目されるであろう（図―9）。これも非相称のスミスソニアンの建物の大小異形の塔が，内容的には外見ほど互いに違わない非相称を生み出す装置であるのと同様に，多様性を作り出す道具なのである。



図―9　James Renwick, Smithsonian Institution 評議員室用肘掛椅子。

今日，我々が様々な理由から複雑な或いは特殊な形態を有する製品や建造物を見て，それを機能的なデザインと思い込むのにも似て，現在ワシントンに建つ「ノーマン・デザイン」のスミスソニアンを当時の評議員たちは，別案「ゴシック・デザイン」よりも，簡潔で装飾の少ない意匠と考えていた。R.D.Owen　も，スミスソニアンの実施デザインは，此見よがしのものでは無いと考え

ていた。[7] アメリカにおける機能主義思想の先駆者と見做される事の多い古典的傾向の彫刻家 Horatio Greenough が過度にピクチャレスクなスミスソニアン・インスティチューションのデザインに警告を発することになるのは、[8] 歴史上の運命であったと言っても過言ではない。スミスソニアンの非相称的形態は、公共建築を中心として、19世紀後半から20世紀にかけてのアメリカのデザインに多大な影響を及ぼすことになるが、そこで失われたものも、その画期的な意匠によって得られたものに劣らず、大きいと思われる。

FORMATION OF ASYMMETRY

by HARUHIKO FUJITA*

NOTES

1) Rudolf Wittkower, *Architectural Principles in the Age of Humanism,* New York, 1971(first publication, London, 1949), PART Ⅱ.
Erwin Panofsky, *Meaning of the Visual Arts,* New York, 1957, CHAPTER Ⅱ, etc.
Mark Girouard, *Life in the English Country House,* New Haven and London, 1978, p.80, pp.87—88.

2) Claude Perrault ,*LES DIX LIVRES D'ARCHITECTURE DE VITRUVE CORRIGEZ ET TRADVITS,* Paris, 1684(first publication, Paris, 1673), p.11(LIVRE Ⅰ, CHAPITRE Ⅱ), p.56(LIVRE Ⅲ, CHAPITRE Ⅰ), etc.

3) Wendel Dietterlin, *ARCHITECTVRA,* Nuremberg, 1598(first part appeared, Stuttgart, 1593; republished, New York, 1968).
"Archway of the Mint" by P.P.Rubens, c. 1635, in Koninklijk Museum, Antwerp.

4) Richard Payne Knight, An *Analytical Enquiry into the Principles of Taste,* London, 1805, pp.212—218.

5) Robert Dale Owen, *Hints on Public Architecture,* New York, 1849(republication, New York, 1978), p. 8 .

6) Owen, *Public Architecture,* pp. 55—56.
Haruhiko Fujita, *AMERICAN DESIGN IN THE NINETEENTH CHNTURY—Archi—*

tectural Expression, 1838—1880—, Ph.D. Dissertation, Osaka, 1982, pp. 33—41.

7) Owen, *Public Architecture,* p. 104 .

8) Hotatio Greenough, "THE SMITHSONIAN INSTITUTION" in "Aesthetics at Washington" ,*Form and Function.*(ed. by Harold A. Small), Berkeley, California, 1947, pp.35—38.

* 1983/84 Government of Canada Award Grantee, University of Toronto.